「立論の部」で発表する法学研究会の藤井代表

法学研究会が活躍

関東学生法律討論会

運営にも尽力

関東学生法律討論会（関東学生法学連盟主催）が6月18日、神田キャンパスで8大学約200人が参加して開かれた。専大での開催は4年ぶりで、参加した本学の法学研究会（藤井天哉代表・法2）らメンバー65人は運営にも力を尽くした。

出題された法律問題について論旨をまとめ発表する「立論の部」には、藤井代表が出場。問題は「居住者が自殺した借家をめぐり、大家が遺族に損害賠償請求訴訟を起こした」という設定で考えられる遺族側の主張を整理し、それが認められるかを論じる――など2問。藤井さんは用意していた論旨を500字割愛し、簡潔な発表で臨んだ。早口でまくしたてる論者が多いなかで聞き取りやすかった半面、持ち時間を30秒残すことに。検事と弁護士の審査員からは高得点を得たが、6位にとどまり「時間配分と質問への対応力を磨き、次はもっと上の順位を目指したい」と反省点をかみしめていた。

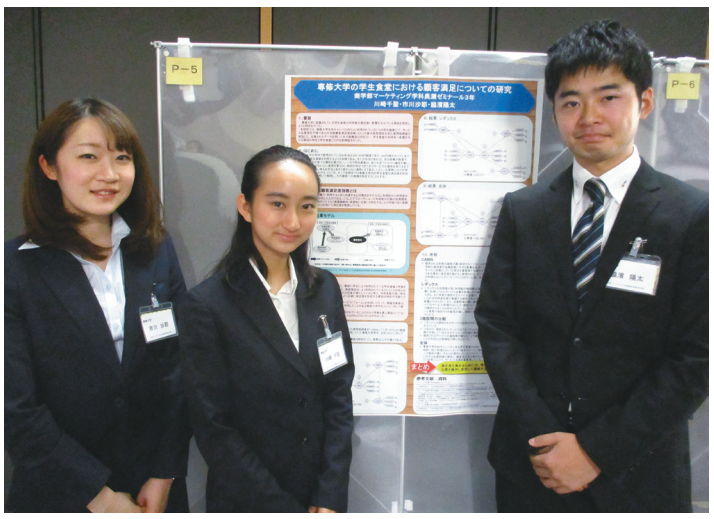
問題を作成し審査員も務めた山田創一法科大学院教授（民法）は、講評で「民法は弱い立場の人を救うための道具。弱者に寄り添う解釈や理論構成を心掛けて」と法律を学ぶ学生たちにエールを送った。

会場責任者として専大生を含む各大学の運営スタッフを束ねた本間健太郎さん（法3）は、肩の荷を下ろしほっとした表情。昨年9月から準備に奔走し、この日も設営や接待、案内に追われた。「人との接し方、組織のまとめ方を学んだ。自分の言動を見つめる貴重な経験になった」と振り返った。

商・奥瀬ゼミ　3年次生3人

学食の満足度実証研究

フードサービス学会でポスター発表



展示したポスターの前で市川さん、川﨑さん、脇濱さん（左から）

マーケティングなどを学ぶ商学部奥瀬喜之ゼミの3年次生3人が日本フードサービス学会でポスターセッション報告を行った。学食の顧客満足について実証研究を行った3人は「大変だったけど非常に勉強になった」と充実した表情を見せる。

発表したのは川﨑千聖さん、市川沙耶さん、脇濱陽太さん。6月3日、立教大学（東京都）で開催された同学会第22回年次大会に参加した。「専修大学の学生食堂における顧客満足についての研究」をテーマに、日本版顧客満足度指数（JCSI）の因果モデルに当てはめ、検証を行った。

3人は今年2月から準備を始め、「図書館でJCSIなどの関連文献を読みあさった」と脇濱さん。4月に学食（9号館CABINと10号館シダックス）で計約200人にアンケートを実施。統計解析の専門ソフトを用いてパス図を作成し、満足度に影響を与える要因を検討した。「学食なのでコストパフォーマンスが良く、量の多さが求められているだろうと予測していたが、品質を重視していることが分かった」と川﨑さんは説明する。

ポスター形式にまとめるにあたっては「印刷直前まで奥瀬先生が詳細にチェックしてくれた」（市川さん）と振り返る。

ポスター発表には専大のほか6大学が参加。他大学は商品開発や商店街活性化といったゼミ活動を紹介した内容が多く、奥瀬ゼミの発表は目を引いた。大学教員や企業担当者らが足を向け、質問を重ねた。詰めが甘い部分を指摘されたり、詳しい説明を求められたり、答えに窮することも。一方で面白い、分かりやすいと言ってくれる人もいて、励みになった。

同学会では、学生にフードサービスに興味をもってもらおうと、初めて大学生によるポスターセッションを行った。奥瀬教授はゼミ生の取り組みについて「難しい課題を乗り越えることで自信をつけてほしい。今回の経験をこれからの学びに生かしてほしい」と話す。

なくそうデートDV

啓発ワークショップ

恋人間の暴力「デートDV」の被害を減らすため知識を深めようと予防啓発ワークショップが7月4日、生田キャンパスであった。川崎市と本学キャンパス・ハラスメント対策室（上田和勇室長）の共催で、NPO法人かながわ女のスペースみずら理事の小山内園子さんが講師を務めた。村松励教授（犯罪心理学）の授業を履修する人間科学部の学生ら約80人が参加した。

学生にデートDVの事例や防止策を語る小山内さん

暴言や監視など精神的な暴力、頻繁な電話やメールなどの社会的暴力、借金といった経済的暴力など、身体への攻撃以外にさまざまな暴力があると小山内さんは説明。さらに、「被害は女性だけでなく男性が受けることもある」と語った。学生らは事例を参考に、暴力が生み出す人権侵害について学んだ。

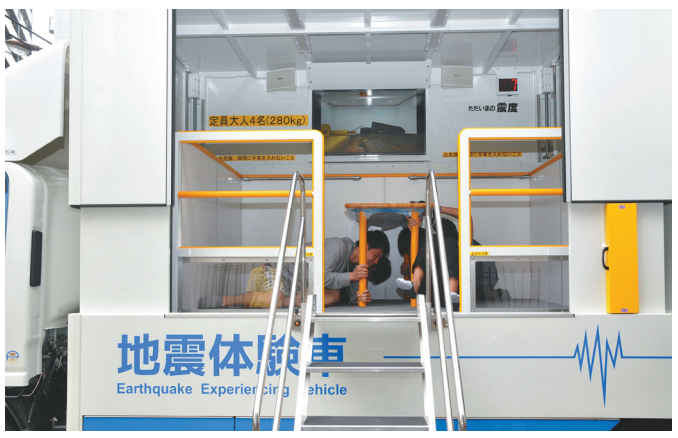
そのうえで、相手を責めず「私はこう思う」など主体的に気持ちを伝える話し方を考えた。

小山内さんは「恋人同士に限らず、バイト先などでも、さまざまなところで暴力は起こりうる。被害者は我慢すればいいと思わず、他者の助けを借りてほしい。専門機関に相談することが有効」と呼びかけた。

受講生からは「自分の行動を省みるいい機会だった」「好きで付き合うのだから、互いの意思や生き方を尊重しなくては」などの感想が上がっていた。

防災意識高めよう

神田　イベントに150人



地震体験車で震度7の揺れを体験

消防団員の手ほどきで心肺蘇生を学ぶ

防災意識を高める参加型イベント「BOSAIフェア」が6月30日、神田キャンパスで開催された。学生、教職員、近隣住民ら約150人が参加し、神田消防署、千代田区、神田警察署などの協力で消火器やAEDの使い方を実践したり、煙が充満した状態や地震の揺れなどを体験し、非常時の対処法を学んだ。

地震体験車で熊本地震と同じ震度7を体験した古川幹太さん（法2）は「思った以上の揺れで、しゃがんでいても危ないと思った。机が固定されていたのでつかまることができたが、自宅ではそうはいかず、対策が必要だと気付いた」と話した。

イベントに協力したSKV（専修神田ボランティア）の伊達航志代表（法3）は「災害はいつ起きるか分からず、今回の体験がいざという時に役立つと思う。私たちも炊き出しを実践し、器具の使い方を理解することができた」と語った。

同フェアと合わせて、神田・生田両キャンパスで初期安全行動訓練や安否確認システムの運用訓練を行う防災訓練（6月26～30日）を実施。また、神田図書館分館では企画展示「未来を生き抜くチカラ防災！」（6月19日～7月15日）が開催された。